

た。三年間は虚しく過ぎていった。日本には異常ヘモグロビンは無いのか？そこで日本血液学会雑誌の第一巻からつづさに調べたところ、異常ヘモグロビンの疑いが持たれる幾つかの論文が見つかった。岩手の黒血症がその一つで、これを十年來研究していた岩手医科大学の田村教授から患者血液を頂き、異常ヘモグロビンであることを証明した。日本最初の異常ヘモグロビンでHb M Iwateと呼ばれ、 $\alpha 87\text{His} \rightarrow \text{Tyr}$ と決定された。

一九六二年柴田らは寒天ゲル電気泳動法でHbAより陰極側にあまり濃くない泳動帯を見つけた。それはHbFと同じ場所であった。しかしそれはHbFではないことがアルカリ変性試験で証明された。その後同じHbが数例みつかった。いずれも高血糖を有していた。そこで「糖尿病患者の血液に見られる異常血色素様成分について」と題して、日本血液学会雑誌、25:327, 1962に報告した。

同じ一九六二年HuismanとDozyが「HbA1aCが二三倍増加した糖尿病患者四人を発見した。

一九六八年、Rahberがテヘラン大学で二一〇〇人の血液を寒天電気泳動法でしらべ二人から異常な帯を発見した。二人は糖尿病患者であった。

それより先、一九五五年Huisman、一九五八年Schneiderらが陽イオン交換樹脂クロマトグラフィーによりHbの微量成分を分析した。

テヘランのRahberはアメリカに渡り、異常ヘモグロビン

研究者と協同して、HbA1cが増加していることを証明した(一九六九)。

Bunn、GallupはHbA1cは β 鎖のValのNH₂にブドウ糖が結合していることを化学的に証明した(一九七五)。

要するにHbA1cは一九六二年、柴田進らとHuismanとDozyによって、各々独立に、高血糖より発見された。

(平成十六年九月例会)

精神医学における障害史の臨床的意義

山田 和夫

精神障害の病因は、いまだ不明のままである。精神医学において、疾患単位は臨床像と経過、薬物反応性によって規定されてきた。ICDやDSM(アメリカ精神医学会診断基準)を見ても、徐々に時に(DSM-III)革命的に疾患概念は変化してきている。そのような中で、障害の歴史の変遷を知る事は、精神障害の本質を見失わないために、また障害構造を深く理解する上で大変重要になってくる。ここでは、統合失調症、双極性障害、パニック障害と三つの代表的障害の歴史を通して、精神医学における障害史の臨床的意義を検証していきたい。ちなみに統合失調症とはかつての精神分裂病であり、双極性障害とは躁うつ病のことであり、パニック障害とはかつての発作性の不安神経症のことである。

統合失調症は時代的に変遷してきている。十八世紀は緊張

病型が、十九世紀は妄想型が、二〇世紀は解体型（かつての破瓜型）が主流であった。統合失調症は徐々に軽症化してきており、緊張病性興奮や荒廃型はほとんど見なくなった。これは統合失調症患者に対する、社会的ストレスが軽減してきているためと考えられている。社会的因子で軽症化してきているということは、統合失調症の病態や治療を考える上で大変重要になってくる。例えば、薬物療法だけでなく、心理社会的治療の有用性も理解できるようになる。それに対して、双極性障害は時代的変遷をしていない障害である。双極性障害は、すでに紀元前五世紀にギリシャのヒポクラテスによって正確に記載されており、其の症状は現代のそれとほとんど変わりが無い。興味深いことは、同時に痛風との関連性が指摘されている。現代、抗痛風薬の中から炭酸リチウムが双極性障害の第一治療薬になってきたのは、単なる歴史上の偶然ではないと思われる。双極性障害の病因を考える上で、障害史は大変重要である。障害史を見ていないと、見当違いな病因を掘り下げて行ってしまうことになる。パニック障害は、DSM-IIIが作られる中で、乳酸の投与で人工的に不安発作が誘発されることと、抗うつ薬のイミプラミンによって不安発作が抑制されるという生物学的エビデンスから、心理的要因で起こるとされた不安神経症を否定し、取って代わる障害概念として登場してきた。それでも、パニック障害の前身であるフロイトの不安神経症や、森田正馬の発作性神経質の歴史的障害概念の変遷史を知る事は、障害構造を理解する上でも、

治療上においても重要である。

(平成十六年九月例会)

消息

「二十一世紀の本居宣長」展

平成十六年九月十八日から十一月七日まで、川崎市市民ミュージアムで「二十一世紀の本居宣長―学問・交流・情報」と題して、本居宣長の業績を関連資料と共に展示した。

なぜ「二十一世紀の……」と銘打ったか、疑問に思ったが、主催者は、宣長が伊勢松坂（今の三重県松阪市）をほとんど出ること無く、門人や書籍などから情報を得て、広い世界で活躍しているのと同じことをしている。これは現代の情報ネットワークの利用の仕方と同じという。また、地理・考古・言語・医学・文学・和歌・謡曲演奏とその分野の広さは現代のマルチ人間の先駆けとなっている。現代と相通じるものがあり、我々二十一世紀の人間が宣長に学ぶべきものが多い。

この展覧会では五つのセクションで構成されている。第一セクションの「宣長思想の系譜―好信楽―」では、宣長が「百科全書的思考」の持ち主であることを伝え、その萌芽が十代の頃、現れていることを示している。入口の正面には、宣長が十七歳の時に描いた日本地図「大日本大絵図行程記」が目につく。陸路と海路が失書され、宿駅が細かく記されてい